

## JALC 見解に対する論文共著者（伊藤浩明先生）の回答

論文の共著者である伊藤浩明先生から、2020年12月11日付けで「日本小児科医電子メールカンファレンス」でお返事があり、許可を得てここに共有します。

12月8日付けでコメントを頂いた崎原論文（SPADE study）につきまして、共著者を代表して投稿させていただきます。

日本ラクテーション・コンサルタント協会様が作成して下さった見解について、著者一同で拝見いたしました。本研究の主旨と結果を正しくご評価いただき、その上でやや拡大解釈されている一部の報道に対して適正な注意喚起をして頂いたことに、深く感謝申し上げます。

私たちはアレルギー専門医として、牛乳への感作を抑制するために少量の人工乳を「抗原」と捉えて、腸管が本来持っている経口免疫寛容を促すことを考えています。完全母乳栄養を否定する意図はなく、逆に人工乳の持つ栄養的・機能的な作用を期待したものではありません。モデル的には、精製した牛乳タンパクや、鶏卵アレルギーの予防研究（PETIT study）と同様に牛乳粉末を用いることも考えられますが、研究の現実性から人工乳を用いたものです。

一方、出生直後に人工乳を哺乳していた問題については、一般病院の中で行った研究として、それを制限する介入を行うことは倫理的にも実務的にも不可能で、実際の臨床的背景の上に実施したものです。幸いなことに、沖縄では大豆ミルクを使用することについて歴史的に大きな抵抗感がなかったため、除去群に対して必要時に大豆ミルクを併用することについては、参加者の違和感なく実施することができました。

人工乳投与群において、計画上は10ml以上投与すればよい、と規定しましたが、実際には比較的多量の人工乳を哺乳させた参加者が存在しました。その結果、人工乳の哺乳量とアレルギー発症抑制に一部関連のありそうな結果が得られましたが、感作抑制に有効な牛乳抗原の最低投与量については、今後さらに検討が必要であろうと考えています。

私たちも、母乳栄養の価値を十分認めるものであり、積極的に混合栄養を促すことを意図したものではないことを、お伝えさせていただきます。

伊藤浩明（いとうこうめい）

あいち小児保健医療総合センター

センター長 兼 免疫・アレルギーセンター長

〒474-8710 愛知県大府市森岡町七丁目426番地